



# 口 夕 口

み だ い が わ ら ひ こ う じ ょ う あ と  
— 御勅使河原飛行場跡 —



表紙: 八ヶ岳にむかってまっすぐに伸びる滑走路跡

2011

南アルプス市教育委員会



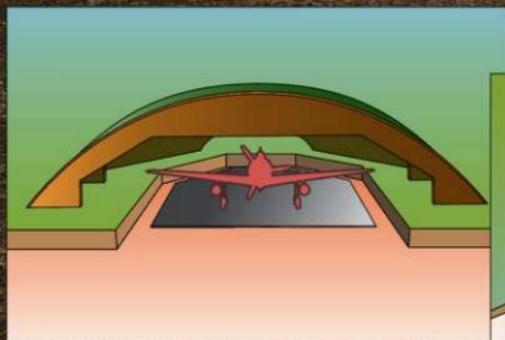


# 掩体壕跡の発掘調査

戦争の記憶を次の世代へ・・・

南アルプス市指定文化財

ロタコ（御勅使河原飛行場）跡 3号掩体壕



発掘調査を踏まえたロタコ掩体壕の復元想像図

## 掩体壕とは・・・

掩体壕（えんたいごう）は、飛行機を空爆の爆風からまもり、格納し、隠しておく施設です。戦時中、飛行場や航空基地などに付随して全国各地に作られ、その平面形態や構造にはさまざまなバリエーションがあります。戦後、その多くは取り壊されましたが、一部遺されたものの中にはロタコのように、文化財として指定されているものもあります。

ロタコにも、かつては多くの掩体壕が存在したと伝えられています。しかし、戦後、工場の建設や農業の妨げになるなどの理由で、やはりその殆どが取り壊され、現在南アルプス市教育委員会が存在を確認しているのはこの内の3基だけとなっています（1～3号掩体壕）。

ロタコに用いられたのはコンクリート製の基礎に木製の上屋を掛ける形態で（木製有蓋掩体）、上屋と基礎は基礎から突出させたボルトによって連結されていたようです。

上部構造がコンクリート製であることが多い掩体壕にあって、ロタコの木製掩体壕は、アジア太平洋戦争末期、鉄材などの資材が枯渇するなかで、これに対応するために考案されたものであることが、明らかにされています。



3号掩体壕基礎のボルト

## 発掘調査の成果

現在残る3基の掩体壕跡のうち、平成17年度には地域で3号掩体壕と呼ばれる1基、平成18年度は2号掩体壕と呼ばれる1基について、考古学的な発掘調査が行われました。

調査前、3号掩体壕は新興住宅街に隣接する空地に、2号掩体壕は桃畑の中にひっそりと眠っており、その基礎は、60年あまりの歳月を経て文字通りもう半ば埋まりかけていましたが、これを重機と人力を用いて発掘し、その構築方法や地表下の構造を探るため試掘溝を設け、部分的に掩体壕の基礎構造の底面まで掘り下げるなどして調査を行いました。

測量の結果、いずれの掩体壕も基礎構造は、現地表下約1.6mに及び、間口、奥行き共に16m程の規模で、同一の規格に基づいて建設された可能性が高いことが明らかになりました。しかし、それぞれ用いられたコンクリートの質や、基礎の構築方法には差があり、現地での測量や試行錯誤があったこともまた、明らかになっています。

なお、発掘調査前に実施した近隣での聴き取り調査では、掩体壕内の底面の形態について締め堅め等していたか？、碎石等を敷いていたか？、掘り窪めていたか？等の質問に、いずれも「何もしていなかった」、「そのままであったと思う」といった聴取結果しか得られていませんでしたが、実際に掩体壕内を掘削してみると、掩体壕内部は、地表から1m程掘り窪められた半地下式の構造で、底面には、幅9.7m、奥行き15m程のコンクリートの堅牢な床面が打たれていることが発掘調査によってはじめて明らかになりました。

一連の調査をうけて、平成20年4月、3号掩体壕は市指定文化財（史跡）となっています。

# 掩体壕跡の発掘調査

## 2号掩体壕



調査風景



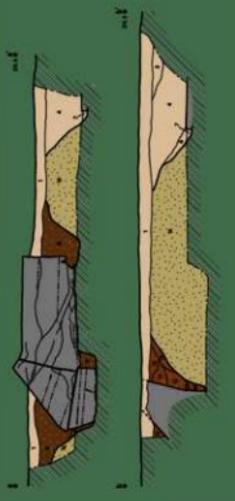
2号掩体壕全景（南東より）



畑の中に残る2号掩体壕の基礎



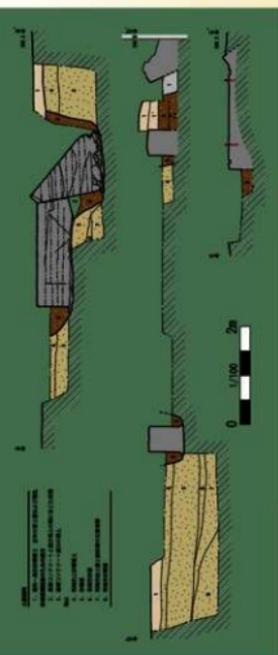
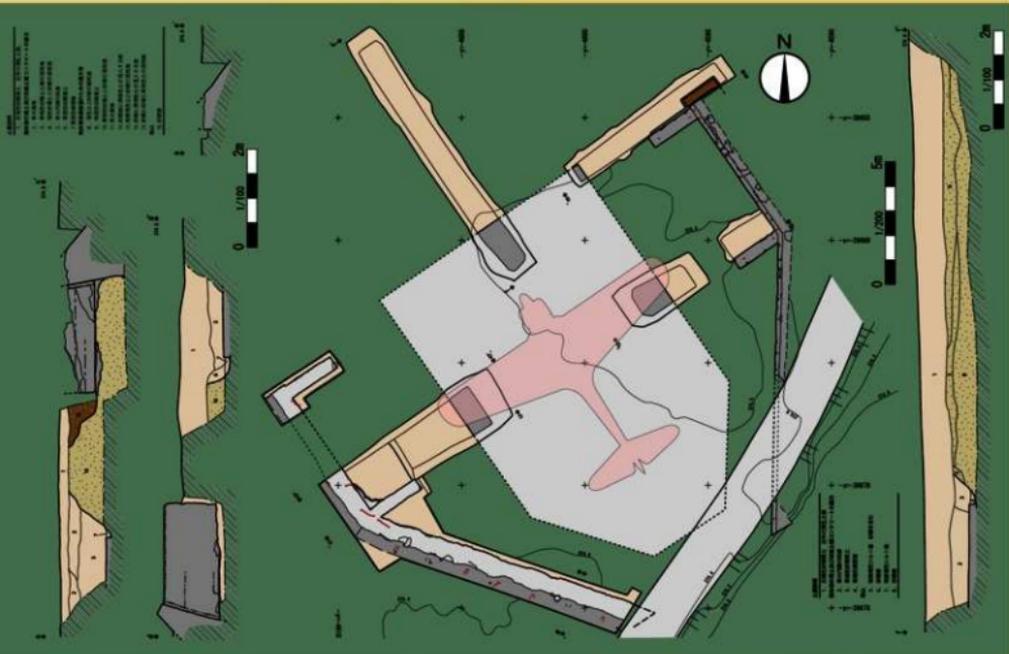
基礎コンクリートの施工状況



## 3号掩体壕

- 発掘調査で確認した遺構
- コンクリート掘出部
- コンクリート掘出予定地盤
- ポルトルの位置
- 人海溝遺構
- 土壌層
- その他の遺構
- 近世の埋土等





3号掩体壕全景（東より）



測量作業



発見されたコンクリートスラブ（床）

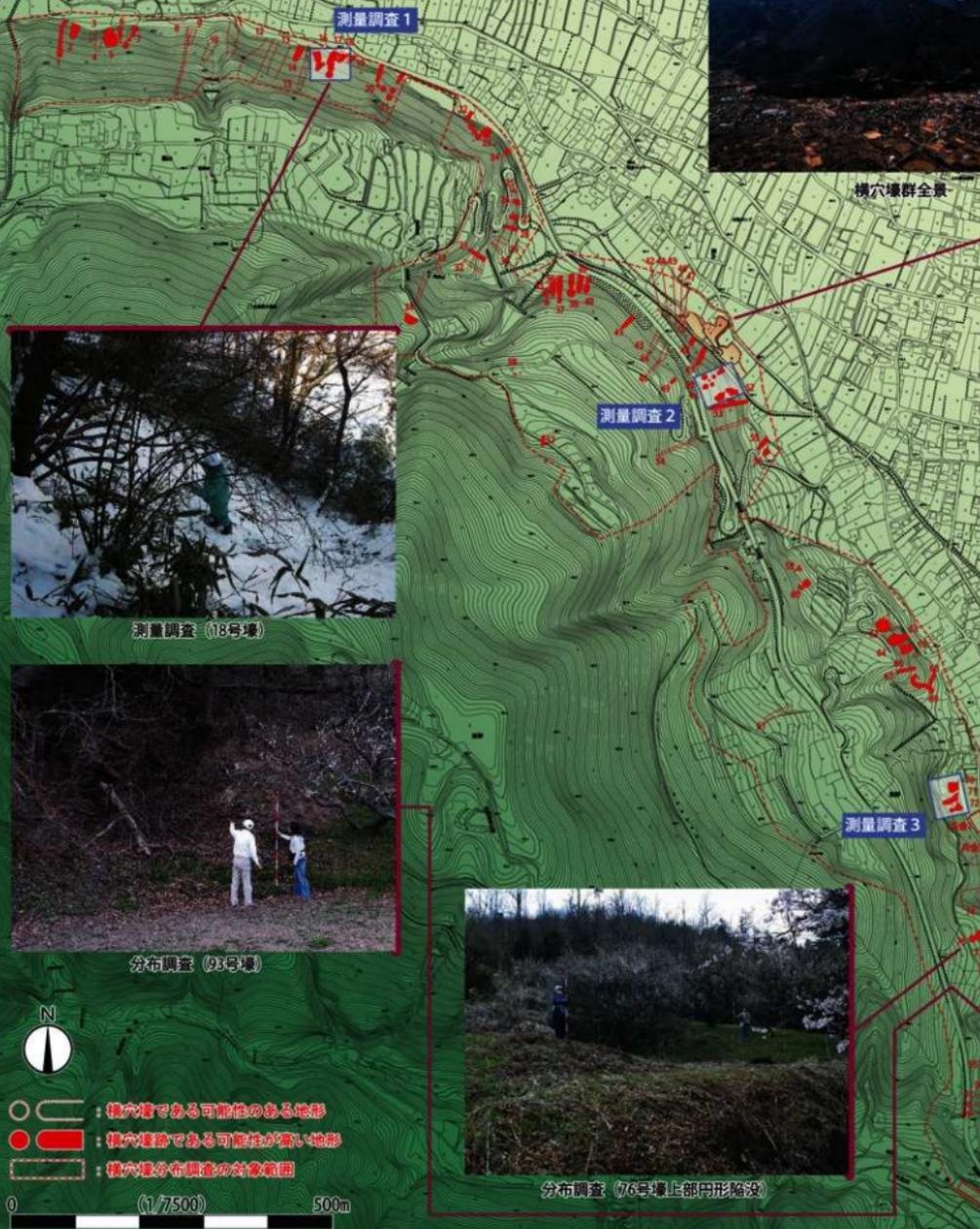


発掘された3号掩体壕の基礎

# 横穴塚群の調査



横穴塚群全景



測量調査 1

測量調査 2

測量調査 3



測量調査 (18号塚)



分布調査 (23号塚)



分布調査 (76号塚上部円形陥没)



- 横穴塚である可能性のある地形
- 横穴塚跡である可能性が高い地形
- 横穴塚分布調査の対象範囲

(1/7500)

500m





横穴壕の痕跡とトロッコによる拵土(ズリ)の痕跡

## 詳細分布調査

ロタコの工事にともなって掘られた横穴壕(トンネル)は、燃料などを隠して備蓄することや航空機部品などの地下工場にすることを目的につくられました。横穴壕が構築されたのは、現在の南アルプス市築山地区から飯野西部のループ橋にかけての延長約2.7kmに及ぶ山の斜面で、山梨県庁に残る史料【次ページに掲載】によれば、終戦時には55基が存在し、一部では、内部で縦横に連結されていたようです。

横穴壕の工事は、ロタコの工事の中では最も早く、昭和19年秋ごろ(証言によっては、昭和18年中)から建設が始まったといわれています。その作業は、もっぱらいわゆる朝鮮人労働者が担っており、崩れやすい地盤での工事は危険を伴い、実際に落盤などによる犠牲者もありました。掘り出した土は、トロッコで壕の外に運ばれ、いくつかの壕は、終戦前に完成し、ドラム缶に入った燃料の備蓄が行なわれたり、旋盤などの工作機械が持ち込まれ、実際に飛行機部品の製作が始まっていたことがわかっています。

しかし、壕が掘られた地盤が非常に脆かったことに加え、戦後の木材需要の高まりに応えるためなどに、壕内を支えていた木製の支柱が次々に持ち出されたことから、現在は全てが崩落し(一部埋め戻したという証言もある)、開口している壕は一基もなく、現状では陥没した山肌その痕跡を辛うじて確認できるといった状態となっています。

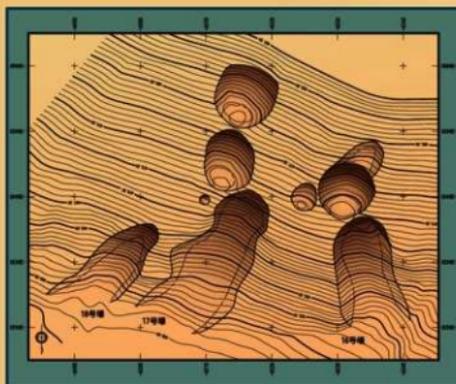
そこで、横穴壕群の調査では、まずその実態を把握するため、横穴壕群が構築されたこととされる山地斜面について、これまでの聞き取り調査の情報などを基に設定された約55haの調査対象範囲に対し、横穴壕の分布を調べる調査が実施されました。調査は、平成19～20年度の冬季に行い、山腹に見られる円形の陥没跡、または山裾に向かってU字形に陥没した地形を見つけ、その位置や形状が記録されました。しかし確認された各壕の痕跡については、当然、自然陥没や沢地形など横穴壕の構築に起因しないものも持っている可能性が高いので、現在はこれを基に史料や聞き取り調査の結果と照合し、より明確に当時の状況を把握していく試みが続けられています。



横穴壕が掘られた、崩れやすい築山～飯野西部の地盤



# 横穴壕群の調査

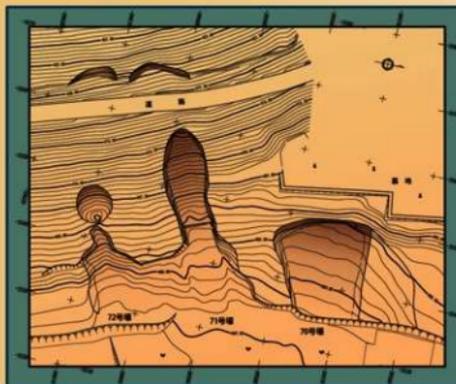


測量調査 1



17号壕円形陥没（案内して頂いた市川さんと）

0 1/250 20m



測量調査 3



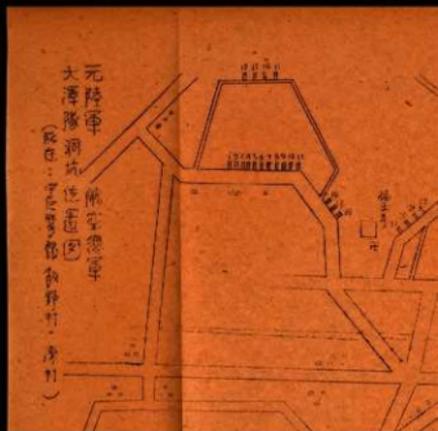
71号壕上から

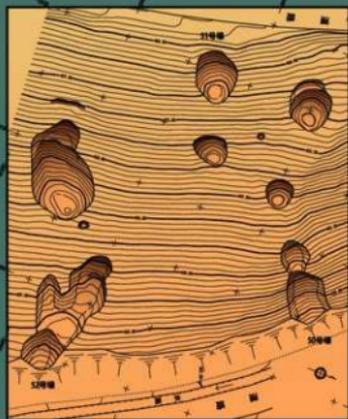
0 1/250 20m

## 山梨県庁史料にみる横穴壕

現在、山梨県庁に遺されている、ロタコの横穴壕の「洞坑位置図」と「洞坑平面図」です。この史料は、終戦直後に、ロタコの坑道を支える膨大な数の木材（別の史料によれば、丸太、内板を合わせて5,631本）を公共施設等の戦災復興の資材として活用することを目的に、その基礎資料として作成されたものと推定されています。

この史料からは、ロタコの横穴壕群の各壕の概ねの位置がわかると同時に、工事が陸軍航空総軍の大澤隊の主導によって行なわれ、その数は55本、入口から10m以下の未完成と見られる壕や、このとき既に内部が「圧壊」していた壕、内部で縦横に連結されていた壕があったことなどが明らかになります。





50号墳上から

※円形の陥没地形が、直線的に並ばず、塚の主軸の湾曲や、内部での塚同士の連結などが推定されます。

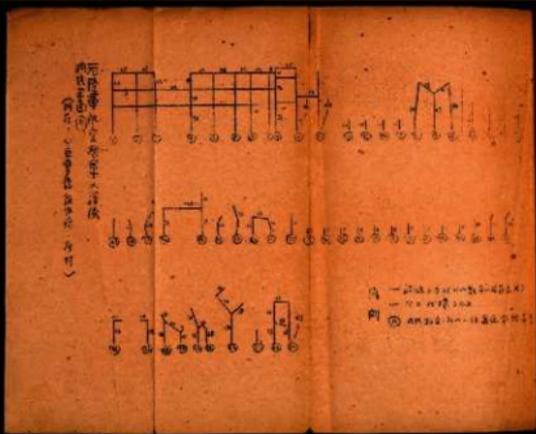
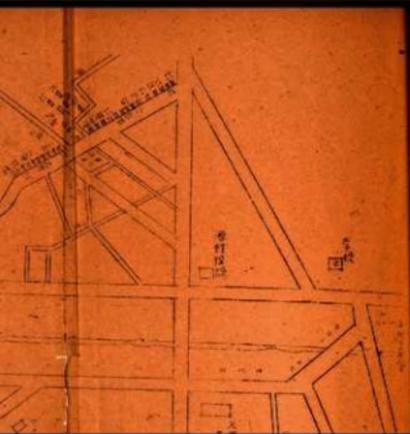
0 1 2 3m

## 測量調査

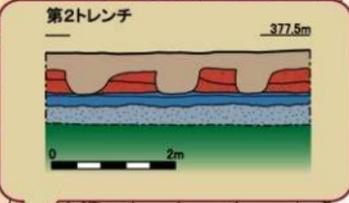
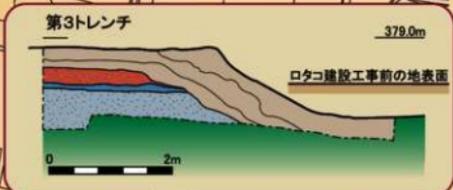
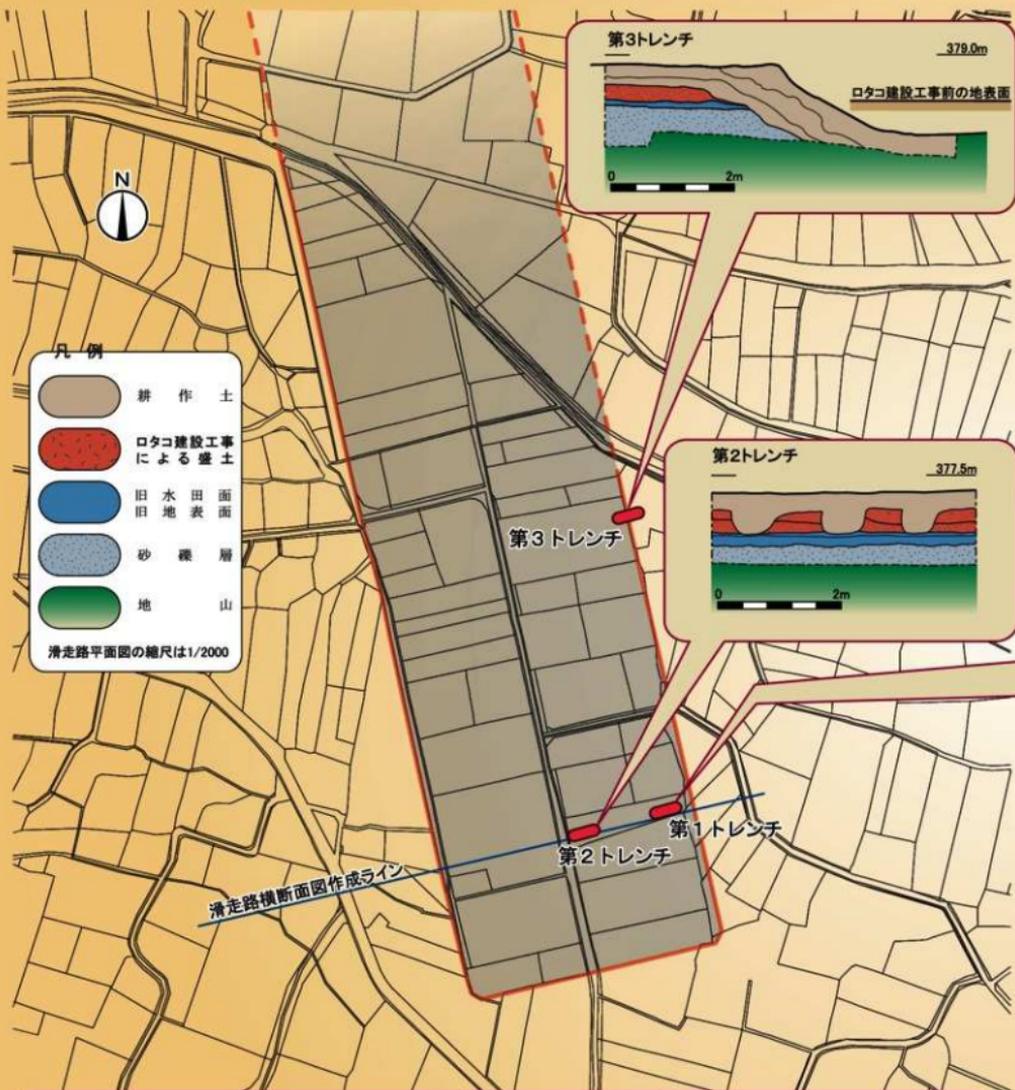
分布調査によって把握された横穴塚の痕跡のうち、その陥没が顕著であり、横穴塚であった可能性が高く、かつ地権者の同意を頂くことができた3地点、9基については、その規模や構築状況を把握するため、詳細な地形測量調査が行なわれ、その形態が記録されました。

ロタコの横穴塚は、戦後すべての塚が崩落などによって閉口し、現状では山肌はその痕跡を辛うじて確認できるといった状況にあります。その横穴塚の痕跡が、測量図に示されるこのような円形やU字形の陥没地形です。

U字形の陥没の先に、円形の陥没が並ぶもの、U字形または円形の陥没のみのも、陥没が直線に並ばず、内部での塚の連結が推定されるものなど様々ですが、今後とも、この陥没地形の丹念な記録を続けることによって、ロタコの横穴塚群の実態が、さらに明らかになるものと期待されます。



# 滑走路跡の発掘調査



▶ 今も残る滑走路の盛土



▶ 滑走路全景（南より）—今も土地区画として、その痕跡が残っています（東京都中央）。また、冬季の季節風（八ヶ岳おろし）に対応するため、滑走路は、まっすぐ八ヶ岳の方向に向けて造られています。

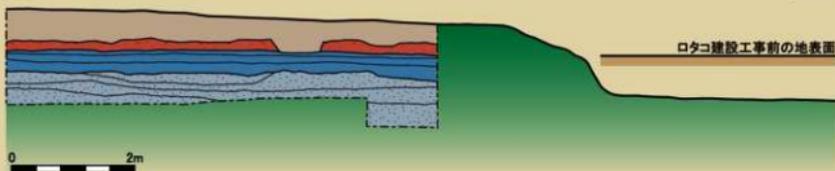


▶ 調査風景



第1トレンチ

377.0m



## 滑走路跡の発掘調査

戦時中の記録や測量調査、また航空写真の観察から滑走路は幅100m、長さ1500m以上の規模であったことが明らかになっています。

滑走路の建設工事は、終戦時にはほぼ完了していたといわれていますが、戦後米軍の飛行機が調査のために一回離着陸したほか、終戦直前に東京の立川飛行場から検査のために飛行機が一回離着陸したとの情報がある程度で、実際にはほとんど使用されなかったようです。

発掘調査に際しては、3本のトレンチ（試掘溝）を設けて、滑走路建設の際の盛土の規模や状況を確認することにしました。

その結果、滑走路の建設工事にあたっては、滑走路両側の土を掘削し、この土を盛り上げて、構築したことが確認されました。盛土の層は第1トレンチと第3トレンチで1層以上、第2トレンチでは2層以上にわたることがわかりました。特に第3トレンチでは、盛土層の上面で締め固め

られたような硬化面を確認することができ、1層ごとの作業工程の一端を垣間見ることができました。

地域での聴取でも、滑走路の東西両側の土を掘り、「もっこ」や「ばいすけ」と呼ばれる道具で運び、「たこ」という木製の道具で地面をつき固めたという証言や、締め固めの機械（ローラー）を見たとの証言がえられました。

▶ 盛土層の確認状況



# ロタコの記憶

地域には、ロタコの歴史を語る様々な遺物がのこされています。

## 朝鮮人軍属の道具



ツルハシ



ジョレン



※柄の部分には陸軍を示す★マークの焼印があります。



木製食器

楯(大)/楯(小)/皿の3点でセットになり、収納時は楯が入子になり皿が蓋となります。いずれも外底部に陸軍を示す★マークが刻印されています。また、皿の側面や底面には、所有者の名前や、朝鮮半島の地名などがあとから刻まれています。(上の皿は展開写真)



ナタ

朝鮮人軍属として、旧陸軍とともにロタコ工事に従事した方々が、終戦の昭和20年8月15日以降帰国する際に、旅費の足しにしたいと地域の農家に取り寄りを依頼したものです。今日までその農家で大切に保管されてきました。



南アルプス市教育委員会では現在も継続的に、小中学校をはじめ、市内外からの史跡めぐりや、見学会、出張授業などの要請に応えています。

ロタコをめぐっては、掩体壕の文化財指定やこれまでの調査成果を踏まえ、新たな局面を迎えつつあります。今後戦争遺跡としてのロタコをどう遺し、どう活かしていけるのか、地域での調査を継続すると共に、これからもみなさまと共に、この貴重な戦争遺跡について知り、そして考える機会を設けて参りたいと考えています。

歴史を  
未来へ





裏表紙: 住宅街にひっそりと眠る3号掩体壕跡



南アルプス市埋蔵文化財ガイドブック 第1集 Ver 2

南アルプス市の戦争遺跡

ロタコー 御勅使河原飛行場跡

---

平成22年度埋蔵文化財保存活用整備事業  
発行日 2011年3月30日  
編集・発行 南アルプス市教育委員会  
〒400-0492  
山梨県南アルプス市鮎沢1212  
電話 055-282-7269  
印刷 (株)サンニチ印刷

---